

第四章 伝統工業に関する学科を設置する徒弟学校について

序 節

第三章では「特種工業ニ関スル学校予定地」に示されている地域を伝統工業の産業基盤のしっかりした所と仮定して推論を進め、伝統工業の地域産業基盤の強い地方では伝統工業の学科のみでも徒弟学校に上昇していくという結果を得たが、これを裏づけるため、本章では漆器と陶器を例にとり地域産業基盤の内容とその関連を検討してみたい。

第1節 陶器を学科とする徒弟学校

陶器を学科に持つ徒弟学校は10校あった。

	名 称	窯・焼物の名	※
甲種工業学校 上昇型	愛知県 町立瀬戸陶器学校	瀬戸 諸窯	○
	福島県 福島県立工業学校	本郷 焼	○
	愛知県 常滑町立陶器学校	常滑 焼	○
乙種工業学校 移行型	岐阜県 土岐郡陶器学校	美濃 諸窯	○
	栃木県 村立大山田陶器学校	小砂 焼	
	愛媛県 砥部村立工業徒弟学校		
廃止型	佐賀県 有田徒弟学校	有田 諸窯	○
	兵庫県 津名郡立陶器学校	志手原 焼	
	福島県 本郷村立窯業徒弟学校	本郷 焼	○
	三重県 丸柱村立陶器徒弟学校	伊賀丸柱	

※欄：「特種工業ニ関スル学校予定地一覧表」に示されている地域

位置は地図IVに示した。前掲表は、その徒弟学校の名称と対応する地域の窯の名称である。

前章で見た様に、本郷村立窯業学校は、改組合併されて福島県立工業学校になるのであり、これらは同一とみなせる。

有田徒弟学校は、明治33年4月4日の文部省告示96号で廃止になっているが、同年4月14日の文部省告示111号で、同位置に佐賀県工業学校有田分校が設置されている。同校は有田徒弟学校と同様、窯業を学科としている。このことより、有田徒弟学校は改組され、佐賀工業学校有田分校になったといえる。

以上のことから、本郷村立窯業学校と有田徒弟学校は、法令によると廃止されたことになっているが、実際は甲種工業学校へ上昇していたことがわかった。よって、この二校を甲種工業学校上昇型徒弟とみなして検討する。

福島県立工業学校以外の9校は、陶器または窯業を唯一の学科とする単科徒弟学校である。

まず、甲種工業学校に移行した三校についてみる。

町立瀬戸陶器学校が建設された瀬戸の地は、東日本で最も代表的な陶器の産地として一般によ

く知られている。瀬戸の焼物の歴史は古く、はじめて窯がきずかれたのは10世紀から11世紀のはじめだといわれており、鎌倉から室町時代にかけてわが国製陶の中心地として認められる様になった。このころの瀬戸の盛んだったありさまは、陶器のことを一般に「せともの」と呼ばれる様になった事でも分る。それ以後、現在まで無数の窯が作られた有数の産地である。

有田のある西松浦郡は、古くから唐津焼と呼ばれる陶器の一大産地である。しかし、有田は陶器の中でも磁器の産地として有名であるし、栄えている。有田の磁器は、帰化朝鮮人の李参平によって持ち込まれた。彼は文祿慶長の役後日本に帰化した。元和2年(1615)帰化朝鮮人18人を引きいて、有田に移り我が国初の磁器をこの地で作った。その当時、有田はわずかの人がしか住まない山村であって、彼が磁器の窯を開いてから栄えた。現在でもわが国製陶の中心となっている。

本郷村立窯業学校、福島県立工業学校が設置された地は、本郷焼(会津焼)で知られている。当地は、東北地方では相馬焼について二番目に古い窯で、美濃の陶工、水野源左衛門が正保4年(1647年)に築いたのが最初である。又、寛政11年(1799年)からは磁器も作り、今では東北地方で磁器をつくる唯一の窯として知られている。東北の製陶の中心といえる産地である。

以上、甲種工業学校へ移行した三つの徒弟学校に対応する産地は、いずれも日本を代表する屈指の産地であることがわかる。

次に、乙種工業学校へ移行した4つの徒弟学校の産地を調べると、常滑は、六古窯といわれる鎌倉時代からの代表的な産地である。

土岐郡陶器学校に対応する美濃諸窯は、桃山時代山地の豪族、土岐氏の保護によって、陶器の中心となった。歴史のある産地である。

それに対し、村立大山田陶器学校と砥部村立工業徒弟学校に対応する小砂焼と砥部焼は江戸時代に起こった比較的新しい窯で、地域の産業としてどの程度成り立っていたか不明である。

次に廃止になった、丸柱村立陶器学校と津名郡立陶器学校に対応する、伊賀焼と志手原焼である。伊賀焼は、室町・桃山時代からの歴史の古い焼物であるが、江戸のはじめまで続いて衰退したといわれている。また志手原焼は、江戸前期に起こった窯で、それがどこまで定着していたか不明である。

これらのことから、陶器を学科とした徒弟学校は全て、地域産業の基盤の上に立っていたことがわかる。そして、工業学校に改組された徒弟学校は、地域の産業基盤のはっきりしない村立大山田陶器学校と砥部村立工業徒弟学校を除いては、全て、日本の代表的産地であり、地域の産業基盤のしっかりしていたことが知られる。また廃止になった丸柱村立陶器学校が基盤とした伊賀焼は、衰退傾向の中にあっただ。

よって、陶器を学科とする徒弟学校に関しては、「伝統工業の地域産業基盤の強い地方では、伝統工業の学科のみでも工業学校に上昇していく」という第三章の結論をそのままあてはめることができる。

第2節 漆器を学科とする徒弟学校

漆器を学科を持った徒弟学校は25校数えられる。それらの名称及び分布は別表IV-1及び地図Vに示す通りである。

漆工の学科を維持しつつ甲種工業学校へ上昇したものは3校、乙種工業学校へ上昇したものは3校ある。まずこの6校について調べてみる。

八戸町立工業徒弟学校の設置された八戸は、青森県では弘前市に次ぐ産地で、普通漆器の産地として定着している。

福島県立工業学校は三章でふれた様に若松市立会津漆器学校が改組合併されたものである。同校のあった若松市は、古来より会津塗としてよく知られた全国屈指の大産地である。

新潟県は新潟市が主位をしめ、市立高田商工学校の設置された高田市についてみれば、江戸時代は主として武器の製作に従事し、明治に入ってから一般漆器を製作しはじめた。これは漸次発展した。又、市立高田商工学校を設置した当時、高田物産会社を設立して、輪島から漆工を雇って、輪島塗漆器を始めている。

黒江漆器学校の設置された黒江町は、全町が皆、漆器業に関係し、町全体が一つの工場のようになっている所で、ここより産する漆器は紀州物とか黒江漆器と呼ばれ、大産地の一つである。

日田郡立工業徒弟学校の設置された日田郡は、もともと漆器の産地ではなく、この土地より豊富な木材を産するので、その木材を使った新しい産業をこの地に起こそうとしてこの徒弟学校を設置した。そして、この学校の卒業生を漆器製造会社を作ってそこに収容し、この会社と日田郡立工業徒弟学校が連携してこの地域に漆工の産業を起こした。

首里区立工業徒弟学校の設置された首里は琉球漆器を産する。ここでは商家が自家に工場を持ち、製造販売しているケースが多い。

この様に、工業学校へ上昇した6校の徒弟学校のある地域ではいずれも漆器の生産が盛んである。又、その内3校が、漆器、又は素地生産の木工を含めた、木工・漆器の伝統工業のみの学校である。

次に廃止になった徒弟学校に対応する地方の漆器産業についてみる。

私立飯山漆器徒弟学校の設置された飯山市では特産品として仏壇を産し、静岡漆工学校のあった静岡市は、特に輸出漆器を産する大産地である。しかし、この2校とも私立であり、設置主体の財政基盤が弱かったため廃校になったと考えられる。

その他の大産地は、石川県の山中漆器徒弟学校が作られた山中村があげられる。ここは輪島とならんで有名な産地である。明治18年に漆器組合が作られ翌年蒔絵伝習所を作って職工養成を行なった歴史をもっているが、山中漆器徒弟学校は廃止されている。この理由として佐藤氏は「徒弟教育の研究」の下降型徒弟学校の事例研究の中で、同村では「当時、尋常小学校の経費さえ手がまわらなかったで、勿論徒弟学校を維持していく余裕がなかった。」⁽¹⁾と財政基盤の弱さをその一つに上げている。これは村立とはいえ、財政基盤の弱さで廃校になった点、前期2つの私立の徒弟学校と同質といえる。

気高郡立徒弟学校が設置された地域はあまり漆器産業がさかんでなく、この学校を作ることに

よって漆器の普及を計画したが失敗した事例である。

香川県の主産地は高松市であり、琴平工業徒弟学校が作られた琴平よりは松材の彫板盆を産するが、産額は少ない。

高知市立工業学校の設置された高知市よりは、古代塗を産するが、その地方の需要に応ずる程度の生産規模であった。

飽託郡工業徒弟学校は明治44年熊本市立工業徒弟学校の開校と同時にこれと合併される。そして、熊本市立工業徒弟学校は明治45年より漆工科を廃止し、塗工科を設置している。

熊本市よりは、竹材の曲物漆器を産するが、素地の性質上種類が少い。飯器も産するが県外に出すにいたらなかった。

宮崎郡立職業学校の設置された宮崎県は、ほとんど漆器を産しないし、他の徒弟学校が作られた地方で、漆器の産地と呼べる所はない。

以上のことは、陶器を学科にもつ徒弟学校の場合と同様、漆器を学科にもつ徒弟学校の場合にも、「伝統工業の地域産業基盤の強い地方では、伝統工業の学科のみでも工業学校に上昇していく」という第三章の結論があてはまることを示している。

同時に、私立飯山漆器徒弟学校と山中漆器徒弟学校の事例は「財政基盤の弱い私立等の徒弟学校は、伝統工業の地域産業基盤の強い地方に設置された伝統工業を学科とする徒弟学校でも廃校になることがある」という第三章の結論があてはまる。

(1) 「徒弟学育の研究」(前掲) 97頁

陶器の産地に関する叙述は、小山富士夫著「日本の陶器」(中央公論美術出版、昭和46年7月15日発行)を参照した。

漆器の産地に関する叙述は、沢田悟一著「日本漆工の研究」(美術出版社出版、昭和41年7月10日発行)を参照した。